

自己免疫性出血症治療の「均てん化」のための実態調査と「総合的」診療指針の作成
に関する研究

分担研究課題 研究的精密検査（主にF5, F10）

研究分担者 森兼啓太 山形大学医学部附属病院・准教授

研究要旨：後天性の原因不明の出血の素因の解析を行い、特に第Ⅴ因子活性低下が疑われる症例における凝固異常症の診断と詳細な因子解析を行った。3症例の解析を行い、その原因が因子活性低下によるものと自己抗体産生の可能性があるものに大別された。

A．研究目的

後天性の原因不明の出血の素因の診断および解析を行う。

B．研究方法

患者に残存している因子活性および、その因子に対する自己抗体の検索のために正常血漿補正混合試験をPT, APTTで行い、凝固因子の特定を行った。凝固第Ⅴ因子活性の低下症例が3例判明した。それらに対し、凝固因子活性値の測定、およびインヒビターの検索をベセスダ法にて定量測定を行った。

（倫理面への配慮）

本研究は、山形大学倫理委員会の承認を得て行った。患者情報は連結不可能匿名化して行い、情報管理を徹底して行った。

C．研究結果

凝固第Ⅴ因子活性の低下症例3例のうち、2例が因子欠乏の可能性があるが、1例が自己抗体産生の可能性がある症例であった。

D．考察

後天性出血性疾患に関しては、その疫学や素因に関して不明な点が多い。更に、血液凝固の機序に与する凝固因子をはじめとする様々な因子のいずれか一つが欠落しても出血性疾患に至る可能性があり、詳細な病態把握が治療に不可欠である。本研究班では、様々な凝固因子の障害に関して分担して研究を進めており、我々は第Ⅴ因子の障害に起因すると考えられる3症例に対して障害の本態を検討した。

その結果、因子活性または欠乏と自己抗体産生と

いう大きく異なる病態が推定された。このような詳細な検討を今後も重ねていくことにより、後天性出血性疾患に対する理解が更に深まり、早期診断と治療に結びつけることができると考えられた。

E．結論

第Ⅴ因子の障害に起因すると考えられる後天性出血性疾患の3症例を解析した。因子欠乏と自己抗体という大きく異なる病態が推定された。このような詳細な検討を今後も重ねていくことにより、後天性出血性疾患に対する理解が更に深まり、早期診断と治療に結びつけることができると考えられた。

G．研究発表

1. 論文発表

Ogawa H, Souri M, Kanouchi K, Osaki T, Ohkubo R, Kawanishi T, Wakai S, Morikane K, Ichinose A. A high titer of acquired factor V inhibitor in a hemodialysis patient who developed arterial thrombosis. Int J Hematol. 2019 Feb;109(2):214-220.

2. 学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし